

氏名・（国籍）	浅野 学（埼玉県）
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	博甲第28号
学位授与年月日	令和6年3月13日
学位授与の要件	学位規程第2条第2項該当
学位論文題目	円珍『法華論記』の研究
論文審査委員	主 査 教授 藤井 教公
	副 査 教授 落合 俊典
	副 査 教授 池 麗梅

論文内容の要旨

本博士論文は、序論・全五章立ての本論・結論・付録の『法華論』諸本校合、から成る。

序論では、「円珍『法華論記』の研究」と題する本論文で取り扱う研究テーマについて述べており、具体的には円珍による本書撰述の経緯・本書所引の『法華論』テキストに関連する諸問題を主軸としながら、『法華論』所説の七喻・三平等・十無上に対する『法華論記』での注釈内容に関連する諸問題について、先行研究を踏まえた上で考察する、と掲げている。

第一章では、「円珍の唐留学と『法華論記』の撰述」という章題の下、各種伝記資料や円珍の請来目録・蔵書目録を手掛かりとして、円珍が最勝会で論議をした明証の属する法相宗の教説に対する意識や、入唐留学時に撰述を開始した『法華論記』の撰述経緯について論じた。

第二章では、「円珍の引用する『法華論』について」という章題の下、第一節では『法華論』の新出資料である真福寺写本を始めとする日本古写経本や、江戸期刊本などのテキスト系統について論じている。第二節・第三節では『法華論記』所引の『法華論』がどのようなテキストであったのかという問題について論じており、本研究の付録で示した、『法華論記』全十巻から網羅的に抽出した円珍所引の『法華論』を中心とする諸本対校に基づいて、円珍の依った『法華論』が古形の勒那摩提訳系統のうち敦煌本・房山石経の勒那摩提訳に近似していることを明らかにした。また、二種の全集本で会入されている『法華論』が異なるテキストを底本としていることを初めて指摘した。

第三章では、「七喻解釈について」という章題の下、『法華論記』と吉蔵『法華論疏』の法華七喻解釈を比較対照するなどした。その結果、『法華論記』では『法華論疏』の解釈と概ね軌を一にする所もあれば、『法華論』の文に対する解釈の視点が異なる場合も確認された。法華経安楽行品第十四所説の髻中明珠の譬喩によって対治される「実に功德有る増上慢心」の注釈箇所では、円珍が「有る釈」として吉蔵の『法華論疏』と同様の説を斥けている所が確

認められ、また天台学的な七方便の解釈が用いられている点の特徴的であった。七喻解釈の比較対照からは、円珍の天台学宣揚の立場が伺えた。

第四章では、「三平等解釈について」という章題の下、特に法相宗との成仏論争で重要視された「四種声聞授記」の記述に注目して、円珍の天台学的解釈に基づいた四種声聞授記の解釈を検討した。円珍は智顗説・灌頂記『妙法蓮華經文句』、湛然『法華文句記』『法華五百問論』、智度『天台法華疏義續』などの天台章疏を頻りに引用しながら、自説を述べており、基『妙法蓮華經玄贊』に代表される法相宗の説を斥け、天台教学を宣揚する立場を取っていた。奥野光賢氏が指摘するように、最澄と徳一の間で起きた三一権実論争に終止符を打ったとされる源信『一乗要決』で重視された湛然『法華文句記』の記述を、円珍が先んじて『法華論記』巻第七末で引用しているが、そればかりでなく、円珍は湛然『法華五百問論』をも重視して引用しており、『法華論記』における湛然説重視の立場は注目される。

第五章では、「十無上解釈について」という章題の下、『法華論記』における解釈を検討した所、七喻・三平等を能頭とし、十無上を所頭と規定した円珍の『法華論』解釈の一視点が伺え、また十無上解釈中にも確認された「吉基」という用例が、吉蔵・基に向けられた批判的文脈で用いられ、この表現が円珍の諸著作中においても『法華論記』でしか見られない独自の表現であることを指摘した。円珍が引用している智顗説・灌頂記『妙法蓮華經文句』で規定された十種の匠の解釈に基づく「吉基」批判や、「吉云」「或云」などとして、吉蔵『法華義疏』、基『妙法蓮華經玄贊』から引用した文に直接批判を加えている箇所などは、批判の方向性が明確であったが、吉蔵と基とを纏めて批判する意図が不明瞭であった点などもあった。

結論では、本論各章の末に提示した小結などに基づいて、本論文で論じた内容を総括している。

付録では、金炳坤氏の先行研究では序品部分までの提示に留まっていた『法華論』の諸本校合について、これを方便品・譬喩品部分にまで範囲を広げ、『法華論』の全巻に亘る諸本の異文情報を提供している。本諸本対校の特色は、①『法華論記』全十巻から網羅的に円珍所引の『法華論』を抽出して示したこと、②先述の通り、『法華論』全巻に亘る諸本対校を初めて提示したこと、③新出の日本古写経本（真福寺本・興聖寺本）を対象資料として選定していること、などにある。本諸本対校は、本論文第二章で論じているように、『法華論』のテキスト系統を判定するための根拠となっている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本天台宗寺門派の祖である円珍（814-891）の著作であり、世親が著した『法華經』の注釈書『法華論』の末注『法華論記』（以下『論記』と略）について、その撰述の経緯と『論記』中に引用される『法華論』のテキストに関わる諸問題、並びにその内容である七喻、三平等、十無上などの教義上の解釈について検討し、これまで未解決であった問題に

取り組もうとしたものである。

本論は序論と五章から成る本論、結論、そして付録の『法華論』諸本の校合、から成る。

序論では、問題の所在として、まず『論記』撰述の経緯の解明、それに円珍が依った『法華論』テキストの問題を扱うとする。『論記』は漢訳『法華論』の注釈書であるが、この『法華論』のテキストに菩提流支訳と勒那摩提訳の二種があり、円珍がどちらの訳に依ったのか、これまで多くの議論がなされてきたが、未解明であった。しかし、近年漢訳『法華論』テキストの研究が急速に進み、現存の二種のテキスト以外に両訳それぞれの古形、両訳との習合本などの存在が知られてくるようになった。そこで、現在は円珍の使用した『法華論』テキストの研究には『法華論』そのもののテキスト研究が必須となったのである。本論の第二章がこれに当てられている。

次に『論記』の教義の七喻・三平等・十無上の教理解釈についても、従来は余り研究がなされてこなかったが、申請者は南都仏教の法相宗や三論宗との解釈上の相違を論ずる上で教理研究は重要であるとする。その背景には、平安初期において、法相宗において『法華論』が盛んに研究されていたことと、三論についても円珍自身がしばしば批判をしていることが挙げられている。

次にこれらの問題について、過去の研究史、先行業績の調査が行われ、それらを踏まえた上で、以下の本論で問題の検討が行われる。

本論第一章では、「円珍の唐留学と『法華論記』の撰述」という章題で、各種伝記資料によって円珍の事跡を簡略に示し、また第三節では請来目録・蔵書目録などを手掛かりとして、円珍が最勝会で論議をした相手の元興寺明詮の属する法相宗の教説に対する対抗意識について述べ、第四節では円珍の唐留学の行程などについて述べ、そして次の第五節で、入唐留学時に撰述を開始した『法華論記』の撰述経緯について、円珍加筆の『開元寺求法目録』の記載によって、福州において、吉蔵および基の法華経注釈を得ていたのと同時に勒那摩提訳の『法華論』を得ていたことは確実であり、そのテキストが『論記』撰述に大きく関わったとしている。

第二章では、「円珍の引用する『法華論』について」という章題の下、第一節では『法華論』の新出資料である真福寺写本を始めとする日本古写経本や、江戸期の刊本などのテキスト系統について論じている。第二節・第三節では『法華論記』所引の『法華論』がどのようなテキストであったのかという問題について論じ、本論の付録で示している『法華論記』全十巻から抽出した円珍所引の『法華論』の文言を上記の諸本と校合し、円珍が依った『法華論』が古形の勒那摩提の系統のうちの、敦煌本・房山石経の勒那摩提訳に近似していることを実証している。このテキスト校合の成果の一つとして、『智証大師全集』『日本大藏経』の二種の全集本に収載されている『法華論』が、それぞれ異なるテキストを底本としていることを初めて指摘している。

第三章では、「七喻解釈について」という章題で、『法華論記』と吉蔵『法華論疏』の法華七喻解釈を比較対照している。その結果として、『法華論記』では『法華論疏』の解釈と概ね軌を一にする所もあれば、『法華論』の文に対する解釈の視点が異なる場合も確認されたとす

る。『妙法蓮華經』安樂行品第十四所説の「譬中明珠の譬喩」によって対治される「実に功德有る増上慢心」の注釈箇所では、円珍が「有る釈」として吉蔵の『法華論疏』と同様の説を斥けている所が確認され、また天台学的な七方便の解釈が用いられている点は特徴的であるとしている。七喩解釈の比較対照からは、吉蔵の学僧的立場の解釈に対して、円珍の天台学宣揚を意図した天台学僧的立場が伺えるとしている。

第四章では、「三平等解釈について」という章題で、特に法相宗との成仏論争で重要視された「四種声聞授記」の記述に注目して、円珍の天台学的解釈に基づいた四種声聞授記の解釈を検討している。「四種声聞授記」は世親が声聞に、一に決定声聞、二に増上慢声聞、三に退菩提心声聞、四に応化声聞と、四種類の声聞を分けたもので、四種類の声聞のそれぞれの成仏に関して多くの議論がされてきたものである。円珍は智顗説・灌頂記『妙法蓮華經文句』、湛然『法華文句記』、智度『天台法華經疏義續』などの天台章疏を頻りに引用しながら、自説を述べており、基『妙法蓮華經玄賛』に代表される法相宗の説を斥け、天台教学を宣揚する立場を取っていたとする。最澄と徳一との間で行われた三一権実論争は、円珍以後の源信『一乗要決』によって終止符が打たれたと一般に言われているが、実は源信以前の円珍が『法華論記』で引用していた湛然『法華文句記』の記述を、後に源信が『一乗要決』にて重要視したことからそのように言われるのであって、源信に先んじて円珍がそのように指摘をしていたことは注目されるという。

第五章では、「十無上解釈について」という章題のもとで、『法華論記』における十無上についての解釈を検討したところ、七喩・三平等を能顕とし、十無上を所顕と規定した円珍の『法華論』解釈の視点が伺え、また十無上解釈中にも確認された「吉基」という用例が、吉蔵・基に向けられた批判的文脈で用いられていて、この表現が円珍の諸著作中においても『法華論記』でしか見ることができない独自の表現であることを指摘している。円珍が引用している智顗説・灌頂記『妙法蓮華經文句』で規定された十種の匠の解釈に基づく「吉基」批判や、「吉云」「或云」などとして、吉蔵『法華義疏』、基『妙法蓮華經玄賛』から引用した文に直接に批判を加えている箇所などは、批判の方向性が明確であったが、吉蔵と基とを纏めて批判する円珍の意図が不明瞭であった点などもあったとする。

結論では、本論各章の末に提示した小結などに基づいて、本論文で論じた内容を総括しており、その成果の一つとして特筆されるのは『法華論記』テキストに引用される『法華論』テキストに対して行われた諸本校合の結果である。

『論記』の本文から抽出された『法華論』は、吉蔵が『法華論疏』で引用する『法華論』とは異なる形を有しており、現存の諸本とも特徴を異にしていることが新たに分かったという。申請者は諸本校合のテキストとして興聖寺本、真福寺本をそれぞれ用いており、その両写本の重要性について認識を新たにしたいという。今後の課題として、厳密な写本研究によって、『論記』のより完全な理解をめざしたいとしている。

以上の内容の本論文について、審査委員会は令和六年三月四日、午後3時から4時10分にかけて口頭試問を実施した。主査と二名の副査によって、申請者の論文は円珍研究に止まらず、日本天台全体、さらには南都仏教までも含む貢献があると判断され、特に『論記』の

テキスト論は、今後の写本研究に新たな貢献をもたらすものとなり得るとの意見があった。しかし、資料テキストの読みについて、精確に注意深く読むことが大事であるとの指摘もあった。

しかしながら、申請者の論文は博士請求論文として、学界に一定の貢献をなすものであると審査委員会は全員一致で判断し、博士の称号を授与するに値すると決定した。